

「根を考察する」という第三章

本義>詳細に説く>法とプトガラをそれぞれ分けて説く>法の無我を説く>三法(現象)の無我を説く>處(六根六境)に法我を否定する>章の著述を説く>[対論者を置く]

ここに言う。「仮にまた、『行く(行為)』と『行く者』と『行かれる(道)』が存在することは無いとはしようが、そう見るとしても、善説より良く成立したことに相互関係して、『視る者』と『視られる対象』と、『視る』等は有ると承認しなければならない。

斯くも阿毘達磨¹より、

『〈視る〉〈聴く〉〈嗅ぐ〉と、
〈経験する〉〈触れる〉〈意〉は
六根であり、それらの
享受対象は、視られる対象等である。 1』

と説かれた。それ故に、『視る』等は、本性として有るのだ。」

それを批判する>「視る」の三法(現象)が本性として成立することを否定する>その正理を他にも適用する>視る行為者を否定する>視る行為対象と行為を否定する>眼が視る行為者であることを否定する>我か識が視る行為者であることを否定する>自らを視ないという理由によって否定する>[理由を挙げる]

(それらは本性として)有るのではなく、ここで眼とは、視るので「視るもの」であるが、形色とはまさしくその対象であると良く示された。

如何様に、視るものは形色を視ないかを示す為に説く。

「視る」自らの我性とは、
それをまさしく視るのではない。
自らを視ないもの、
それが他を如何様に視ようか。 2

そこで、その視るものは、自らの我性をまさしく視るのではない。(何故ならば)自らの我性に対して行為することは矛盾する故である。それ故に、自らの我性を視ない故に、耳等の如く青色等をも視ないことになる。それ故に、視るものは有るのではない。

^{あびだつま}
1 阿毘達磨：釈尊入滅後、龍樹生誕時に興隆していた部派仏教、毘婆沙部の教え。

自らを見ないという理由によって否定する> [不確定因を斥ける]

もしまた、「視るものは自らの我性を視ないとはしようが、それでも他を視るのであり、例えば火の如くである。このように、火とは他である我性のみを焼くことをするが、自らの我性を(焼くの)ではない。その如く、視るものも他のみを視るけれど、自らの我性を(視るの)ではない。」といえよ。

これも正理ではない。何故ならば、

「視る」が良く成立させられる為に、
火の例をあげることはできない。

視るものが良く成立させられる為に、君が火の例を提示したことによっては(証成することは)できない—「不可」や「効力が無い」や「正しくない。」という意味である。何故ならば、

過ぎたと、過ぎていないと、歩むによって、
それには、「視る」と共に返答しよう。 3

視るものと一緒に留まるので、「視るものと共に」である。君によって「視るもの」が良く成立させられる為に例が挙げられたことに対しても、本義である「視るもの」についてと一緒に返答した—批判したのである。「何によって」といえよ、

「過ぎたと、過ぎていないと、歩むによって」

と説かれ、「何故ならば、過ぎた(道)を行かず、過ぎていない(道)をも(行くの)ではないけれど、歩む(道)を(行くの)ではないように、火も焼けたものを焼かぬが、焼いていないものも焼かない。」等によって、等しく述べたまえ。

また、過ぎた(道)と、過ぎていない(道)と、歩む(道)を行かぬが如く、先ず『視た(もの)』を視ず、『視ていない(もの)』も視るのではない。『視た(もの)』と『視ていない(もの)』以外に、『視つつある(もの)』を知るとはならない。」等と述べたまえ。

斯くも、

「先ず、行く者は行かず、」²

等を説かれた如く、「先ず、焼く者は焼かず、」等と述べられるべきであり、その如く「先ず、視る者は視ず、」等によって、火の例と一緒に「過ぎた(道)」「過

² 「先ず、…行かず、」:『根本中論』第2章8偈。

ぎていない(道)」「歩む(道)」と等しく批判する故に、「火の(例の)ように、
 視るものが成立した。」ということとは正しくない。それ故に「視るものは自らの
 我性の如く、他をも視るのではない。」というこれが、成立したのである。

自らを視ないという理由によって否定する> [意味を要約する]

そうである時、

僅かにも視ない時には、
 「視るもの」ではない。
 視るので、「視るもの」であるという、
 それが如何様に正理となろうか。 4

そのように、僅かにも視ぬことによって、視るものではない時、視ないもの
 がまさしく視るものであるとは正しくない故に、「視るので、視るものである。」
 と述べることは正理ではない。(例えば) 柱等の如くである。

仮にまた、韻文の綴文法に従って「視るものではない。」という直後に「視る
 ものは、視ることによってであると、」と唱えることもあろうが、そう見ても説
 明する時には

「視るので、視るものであるという、それが如何にして正理となろうか。」
 と唱えたまえ。

眼が視る行為者であることを否定する> [視る行為と関係する・しないを考察して否定する]

他にも、ここで「視るので、視るものである。」と述べれば、視る行為と眼は、
 視る本性を持つものか、視る本性を持つのではないものか、何れと関係すると
 考えるのか? 「双方のようにも適さない。」と説く。

「視る」は、「視る」そのものではなく、
 「視る」でないものは、まさしく視ない。

「先ず、『視る』本性を持つ、視る行為を具えるものは、再度『視るので』と
 いて、行為と関係することは不合理である。(何故ならば) 視る行為が二つに
 なる背理となる故と、『視ることをするもの』が二つになる背理となる故である。
 『視る』本性を持つのではないものも、視ない。(何故ならば) 視る行為と離れ
 る故に、例えば指先の如くである。」というお考えである。そのように、

「視る(もの)は、『視る』そのものではなく、『視る』でないものは、
 まさしく視ない」

という時、

「視るので、視るものであるという、それが如何様に正理となろうか。」³という、まさしくこれに繋げたまえ。

或る者は、『生じつつある単なる主体であるこれは、行為無くして生じるので、滅したとしても、対象を少しも視ない。(何故ならば) 行為が無い故である。それ故に、〈視るものは視ない。〉というこれは(既に) 成立しているものを(再度) 成立させるものである。』と思惟する。

これに述べよう。もし、世俗名称の支分となった行為が無ければ、その時単なる主体も無くなるだろう。(何故ならば) 行為と離れる故に、虚空の花の如くである。然れば、行為と離れた単なる主体であると理解されると、何処でなろうか。

それ故に、「もし世俗諦であるならば、単なる主体の如く、行為も承認する。しかしながら真如を思惟するならば、行為の如く単なる主体も有るのではない。」と承認したまえ。

斯くも『四百論』より、

「行為を具える恒常は無い。全く行く(もの)に行為は無い。行為が無いとは無に等しい。無我を、君は何故好まないのか。」⁴

と説かれた。それ故に、他派のこの論法は(自派を) 傷つけるものではないが、我々にとって既に成立しているものを(再度) 成立させる過失ともならない。

視る行為者を否定する > [我が識が視る行為者であることを否定する]

ここで言う。『視るので、視るものである。』と行為者を成立させることは承認しない。ならば何かといえば、『これが視ることをするので、視るものである。』と、行為するものを証成するのである。然れば、かように述べられた過失となる背理にはならない。行為するものとなるこの『視る(もの)』によって、視ることをするそれが『視る者』であるが、これも識、あるいは我でも構わないが、(それは) まさしく有る。行為者が有ることからも、『視る(もの)』が成立したのである。」

述べよう。

³ 「視る…なるか。」: 『根本中論』第3章4偈。

⁴ 「行為を…ないのか。」: 『四百論』第10章17偈。

「視る」そのものによって、視る者も、
解説されたと知りたまえ。 5

そこで斯様に、

『視る』自らの我性とは、⁵

等によって「視る（もの）」に対して批判を述べた如く、視る者についても、「視る（もの）」についてと類似していると知りたまえ。このように、「視る者自らの我性とは、『視る（もの）』によって、まさしく視るのではない。自らを視ないもの、それが何を如何様に視ようか。」等によって述べられる。それ故に、『視る（もの）』の如く、視る者も有るのではない。」と成立した。

ここで言う。「視る者はまさしく有る。（何故ならば）その行為対象と行為するものが有る故である。ここで、無いものには行為対象と行為するものは無く、例えば石女の子の如くである。行為者においては、行為するものである『視る（もの）』と、『視られる対象』である行為対象も有るのであり、それ故に切る者の如く行為対象と行為するものが有る故に、視る者もまさしく有るのである。」

述べよう。「視られる対象」と「視る（もの）」は、まさしく有るのではない。それ故に、視る者が有ると何処でなろうか。「視られる対象」と「視る（もの）」は視る者に相対関係しているが、それも確かに分析すれば、

捨てていない視る者は有るのではなく、
「視る」を捨てたとしてもである。

ここで、「視る者」という何かが有るならば、それは「視る（もの）」との相対関係と共に有るとなるか？相対関係が無いとなるか？

そこでもし、「視る（もの）」との相対関係と共にあることを捨てていない「視る者」を主張するならば、その時、成立したものか、成立していないものが「視る（もの）」に相互関係することになるが、そこで成立した「視る者」は「視る（もの）」に相互関係するのではない。成立してから、「視る者」も「視る（もの）」に相互関係して何をするのか。成立したものは、再度成立させられるものではない。

「何。成立していない視る者が、『視る（もの）』に相互関係したのである。」
といえは。

⁵ 「視る・・・とは、」:『根本中論』第3章2偈。

成立していない故に、石女の子の如く、「見る（もの）」に相互関係したことは無い。

そのように先ず、捨てていない—「見る（もの）」に相互関係して、見る者になったことは無いのである。

「見る（もの）」を捨てた見る者も成立しない。（何故ならば）「見る（もの）」に相互関係が無い故であり、それは前述した。

「見る」の三法（現象）が本性として成立することを否定する＞ [見る行為対象と行為を否定する]

それ故に、そのように「見る（もの）」を捨てたか、捨てていない見る者が有るのではない時、

見る者が無ければ、それら視られる対象と、
「見る」が何処にあらうか。 6

見る者が無ければ、因が無い「視られる対象」と「見る（もの）」はあり得ないので、それらが有ることから見る者が成立したと、何処でなろうか。

ここで言う。『『視られる対象』と『見る（もの）』は、まさしく有る。（何故ならば）それらの結果が有る故である。そこで、

『斯くも、父や母に、依拠して子は生まれるという如く、眼と形色に依拠して、識は起こると説かれた。』⁶

というが、『視られる対象』と『見る（もの）』に依拠して識が起こるが、三つが集まったことより有漏⁷の触が起こり、触と一緒に起こるものが受である。そしてその縁（条件）によって愛（が起こるの）である。そのようであれば、『視られる対象』と『見る（もの）』という因を持つ輪廻の四支分は、有るのであり、それ故に、それらの結果が有る故に、『視られる対象』と『見る（もの）』の二つは有る。」⁸

6 『父と…説く。』：ツオンカパ著『正理の海』より。「ここで、『斯くも、父や母達に…』と、挙げられた一偈の韻文は、インドの他の三註釈論書には無く、この註釈においても、それについて説明をなさない。観世音戒が『根本中論』に四百四十九偈あると説かれたこととも合わないので、誤版より訳したと明らかである。」

7 有漏^{うろ}：輪廻に落ちる原因となるもの。

8 「『見る…有る。』：十二縁起と関係した対論者の主張。十二縁起とは、輪廻に生を受ける十二段階。無明・行・識・名色・六処・触・受・愛・取・有・生・老死。

述べよう。もし、識等のまさしく四支分が有れば、その二つは有るとなるが、(それらは) 有るのではない。このように、

視られる対象と「視る」は無い故に、
識等の四支分は、
有るのではない。

ここで、「視る者は無いので、『視られる対象』と『視る (もの)』の二つも無い。」と既に述べた。それ故に、識と触と受と愛という、識等の四支分が有ると、何処でなろうか。それ故に、識等が無い。

ここで言う。「それらはまさしく有る。(何故ならば) それらの結果が有る故である。ここで、『愛という縁によって取』等によって、取と有と生と老死等は、識等の四支分より生じる。それ故に、識等は有る。(何故ならば) それらの結果が有る故である。」

述べよう。もし、識等の四支分が有れば、取等有るとなろうが、「視られる対象」と「視る (もの)」が無いので識等の四支分は有るのではない時、

・・・・近取等が、
如何様であれば有るとなろうか。 7

「近取等は有るとはならない。」という意味である。

それを批判する > [その正理を他にも適用する]

ここで、残りの諸々の感覚器官の解説が、「視る (もの)」(の解説) に似て類推される為に、

「視る」によって、「聴く」と「嗅ぐ」と、
「経験する」と「触る」と「意」において、
聴く者と、聴かれる対象等を、
解説されたと知りたまえ。 8

と説かれた。

頭句論 [第3章]

處（六根六境）に法我を否定する＞ [了義の教証と合わせる]

世尊が、

「眼が諸々の形色を見ず、意が諸法を知らず、何処かへ世間は入らない。これは、最勝の真実である。何処かに縁が集まることによって見られると、導師が良く示された、その居処を勝義であると捉えることは、思い込みに通じることになる。」

と説かれたものや、その如く

「眼と形色に依拠して、眼識がここに生じようとも、形色は眼に依拠したのではない。形色は眼に移ったのでもない。無我であり、美しくないこれらの法（現象）を、再度、我であり美しいと思ひ込む。無に誤った分別をして、それより眼識が起こる。識が減し、起こることから、識が尽き、増上すると見られる。何も行き来は無く、空であり、幻に似ていると、瑜伽行者は見る。」

と説かれた。

その如く、『優波離請問經』よりも、

「眼とは、一切を具えれば見るとなり、眼が諸々の形色を見ることも、夜に諸縁が揃わなければ見るとはならぬ。それ故に、『具有』と『離』とは妄分別である。眼は現れに依拠して、快い、あるいは不快な様々な形色を見るので、そのように現れに依拠して見るので、それ故に、眼がいつ時も見ることには無い。快い音声とされるものは、それも、いつ時も内に入ったことは無い。それが行くことは対象（認識されるもの）として有るのではなく、分別（概念作用）の力によって諸々の音声は起こるのだ。」

と説かれた。その如く、

「歌や踊りや楽器の音も、捉えられる対象ではない。夢のようであると知らぬ者にとっては蒙昧と執着の因となる。全くの思い込みに執する無知な者達は見失い、煩惱の奴隷である幼き者の如く、我はなっていないか？」

と説かれた。

處（六根六境）に法我を否定する＞ [章の名を示す]

阿闍梨月称の御口より綴られた頭句より、「根を考察する」という第三章の解説である。